

北パレスチナ出土のガラス工房址と交易用ガラス

谷 一 尚

はじめに

北パレスチナ Palestine のアッコ Akko (アクレ Acre) 付近は、ローマの文献によればガラス製造の一大中心をなしていたとされている¹⁾にもかかわらず、この時期におけるガラス工房址については、これまで学術発掘による出土例がほとんどなかったため、推測や文献からの推定が多く、詳細な点は不明であった。

ところが、1964年から1971年にかけて行われた、ウェインバーグ G.D. Weinberg を中心とする米国ミズーリ大学 The University of Missouri とコーニングガラス博物館 The Corning Museum of Glass との、ジャラーム Jalame²⁾ (図1) の合同発掘調査により、1世紀後半から5世紀初頭にかけてのガラス工房址が発見され、1988年には報告書も刊行されるに至っ

た³⁾。また、1992年には、その南の地中海沿岸の町ハデラ Hadera の Beit Eliezel (図1) において、イスラエル考古局 Israel Antiquities Authority のヤエル・ゴリン＝ローゼン Yael Golin-Rosen 女史らにより、7世紀(東ローマ期)のガラス工房址が発掘された⁴⁾。

こういった近年の成果により、文献や推定によって考察していた従来のガラス製造過程を、詳細に明らかにできる出土資料が次第に整いつつある。この小論は以下、発掘当事者の報告をもとに、それぞれの発掘成果を整理し、1993年3月の筆者の現地調査における知見を加えて、ローマ期におけるガラス製造過程とその交易の実態についての解明を試みようとするものである。

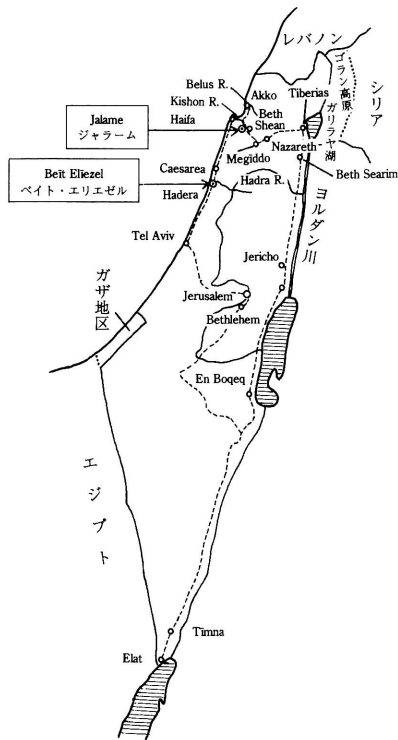


図1

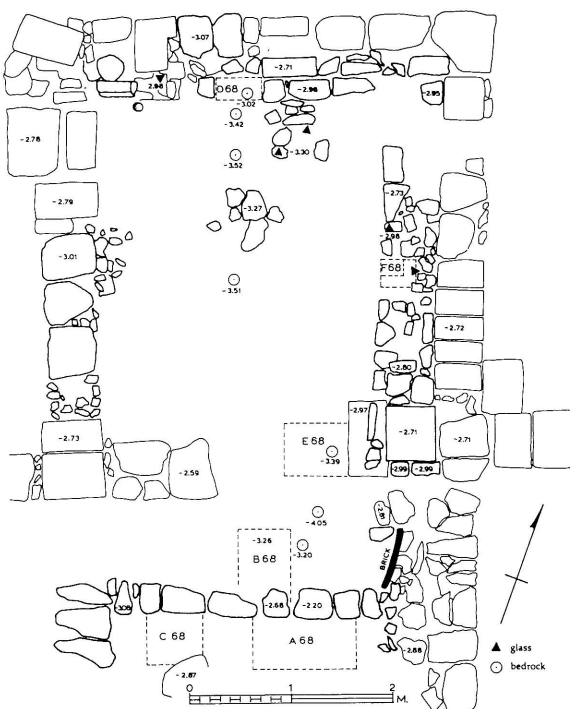


図2 ジャラームのガラス炉址 (Weinberg 1988, fig. 3-3)

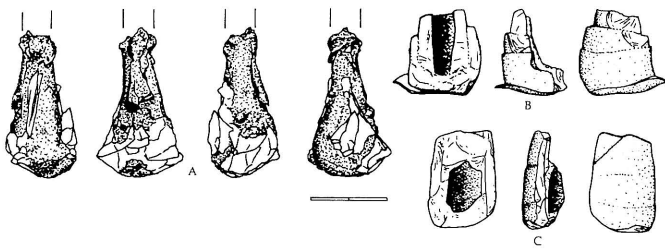


図3 A：ガラスを付着したポンテ棒先端
B・C：ポンテ棒からはずされたガラス片，内部に鉄酸化物残留
(Weinberg 1988, fig. 3-9) いずれもジャラーム出土

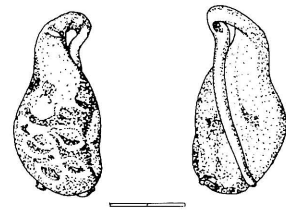


図4 ひきのばされたガラス小塊（ドロップ），ジャラーム出土（Weinberg 1988, fig. 3-10）

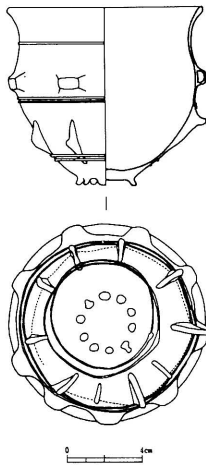


図5 ハッサニ・マハレ出土突起碗
(曾野・深井 1968, Pl. 70-1)

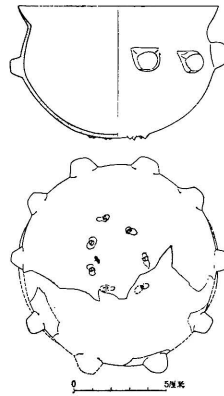


図6 華芳墓出土突起碗（安家瑤 1986, fig. 2）

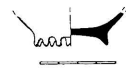


図7 ジャラーム出土突起碗底部断片
(Weinberg 1988, fig. 4-22: 161)

ジャラーム遺跡の概要

ハイファ Haifa の南東 10 km, カルメル山 Mt. Carmel の北西山麓にある。1964-1968年および、1971年発掘。第1期 (ca. 75-125), 第2期 (275-350), 第3期 (351-383), 第4期 (383-5世紀初頭) の層位から大量のガラス容器断片, ガラス残滓, ガラス炉址 (図2), ガラス製作に伴う残留物 (図3, 4), クラウン法による板ガラス片, コイン, ランプ, 土器などが出土した。

ベイト・エリエゼル遺跡の概要

ハイファの南 18 km の都市ハデラの地中海沿岸にある。1992年道路建設にともない発掘。

ガラス製品をつくる前段階のガラス塊（＝プロス，トルコ青・オリーブ緑・マンガン茶の3色あり）を専門に生産する工房址。燃料・原料・交易の各ルートに近いという立地条件を，ベイト・エリエゼルは満たしている。プロス生産はガラス製品の加工工程とは切り

離されて独立していた。特にプロス生産は，非常な熱と煙とを排出するため，町から離れたところに置かれていたらしい。この種のものでは，これまでで最大規模の20余の設備を持ち，各設備には小炉が西向きに隣接して築かれていた。これは，海から吹く北西の風を受け易くするためで，炉の推定温度は700～1,000度C。ガラス原料を溶かして何トンものプロス塊を一度に生産することができたと考えられる。

ジャラーム出土の交易用ガラス

ジャラームについては，文献でしか知られていなかった，ローマ期のガラス工房址の出土により，この地域でつくられたガラスの器形，種類，技法が解明できたこと，および出土したガラス滓などの成分分析により，この地域産のガラスの標準資料がえられたこと，など，その発掘の意義は大きい。

また，特に東方地域出土のガラス容器との関連にお

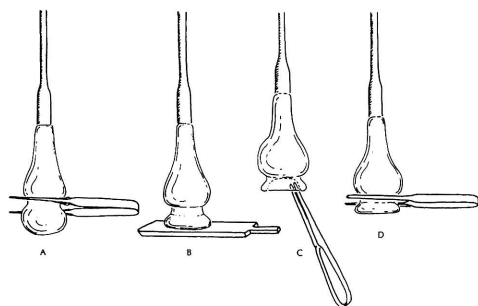


図8 タネあて脚台のつくり方 (Weinberg 1988, fig. 3-11)

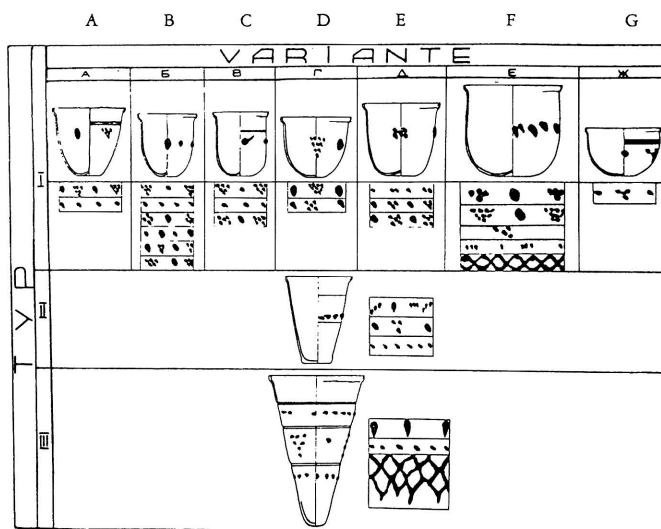


図9 紺色斑点文容器の類型 (Sorokina, N. 1972, Abb. 2)

いては、(1)イラン、ギラーン州デーラマン Dailaman のハッサニ・マハレ Hassani Mahale の7号墓⁵⁾(図5)や、中国、北京市西郊の華芳(西晋の幽州刺史王浚の妻、304年没)墓⁶⁾(図6)で出土したのと同様の突起ガラス碗底部⁷⁾(図7)、(2)エジプトのカラニス Karanis⁸⁾、イスラエルのベト・シャリム Beth Shearim⁹⁾、日本の新沢千塚126号墳¹⁰⁾などで出土したタネあて脚台 Pad base のガラス皿(図8)、(3)コーカサス Caucasus のギリヤッチュ Giljatsch¹¹⁾、グルジャ Georgian のサムタブロ Samtavro^{11a)}、ウクライナ Ukraine のシュロフカ Shurovka¹²⁾、ハンガリーのタッツ TÁC (ローマン・ゴルシウム Gorsium)¹³⁾、韓国の慶州市金鈴塚¹⁴⁾などで出土した紺色斑点文碗(図9, 10)、などがあげられる。このうち(2)(3)は、同一技法でありながら、ジャラームでは出土していない器形の容器が、他地域から出土しているので、すべての作例がこの地で製作されたということはできないが、(1)の突起碗や、二股リブ bifurcated ribs 装飾を有する容器¹⁵⁾(図11)に関しては、非常に特殊のもので、現在までのところ、工房址としてはジャラームでしか出土しておらず、この地域での製作の可能性が考えられる。

ベイト・エリエゼル出土の交易用ガラス

ベイト・エリエゼルについては、ブロス塊専用の独立した工房が、少なくとも7世紀に存在したことが確

認できた意義は大きい。詳細な分析は、正式の報告書をまわってから行いたいだが、1世紀の南海貿易の貴重な記録である『エリュトゥラー海案内記』にみられる、インドのバリュガザ Barygaza に運ばれた「未精製のガラス石 ὕελος ἀροψή」¹⁶⁾と同様の交易用ガラス塊の、やや時代は下がるが実際の出土例と考えられる。

(この小論は、1994年7月2日、金沢大学文学部における西アジア考古学研究会での発表をもとに、その後の知見を加えたものである。)

注

- 1) ストラボ Strabo (ca. 63 B.C.-A.D. 21) 『地理』、大プリニウス Gaius Plinius Secundus (23-79) 『博物誌 Historia Naturalis』(77年完成)第36巻65章、ヨゼフス Josephus Flavius (ca. 37-95) 『ユダヤ戦記 Bellum Judaicum』、タキツス Tacitus Cornelius (55-120) 『歴史』第5巻第7章など。
- 2) 現在の公式名称は Jalameh el-Asafna. *British Survey of Western Palestine* 1878 では、小村 Jalameh の北の Khirbet el Asafna, また、Palmer, E.H. *The Survey of Western Palestine* 1881 では、Khurbet el Asafneh などとなっている。
- 3) Weinberg, G.D. 1988, pp. 24-37.
- 4) 発掘関係者のご教示による。
- 5) 曾野寿彦・深井晋司 1968, p. 41, cpl. 1, pls. 41: 1a-b, 70: 1.
- 6) 北京市文物工作隊 1965, p. 22. 安家瑤 1986, p. 173, fig. 2.
- 7) Weinberg, G.D. 1988, pp. 59-60, fig. 4: 22 (no. 161).
- 8) Harden, D.B. 1936, pp. 53-55, pls. 1, 11.
- 9) Weinberg, G.D. 1988, p. 50, fig. 4: 9.
- 10) 榎原考古学研究所 1977, pp. 48-52, 87-88, fig. 29, 30, pl. 51.

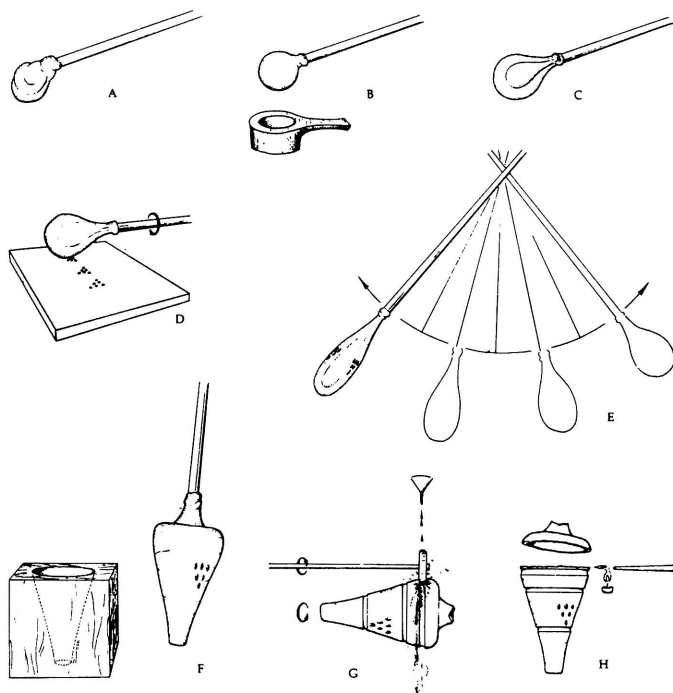


図10 紺色斑点文ピーカー（ランプ）の技法
(Weinberg 1988, fig. 4-45)

A：吹竿の先にタネガラスをまきつける，B：木製リングで整形，C：吹く，D：紺色斑をあらかじめ板の上に並べておき付着させる，E：左右にふって器形をのばす，F：木型に吹き込む，G：徐冷後，口縁部に溝をつける，H：火吹きランプで焼き切り，口縁をならす



図11 二股リブ装飾の容器 (Weinberg 1988, fig. 4-39)

- 11) Sorokina, N. 1972, S. 74.
- 11a) *ibid.*
- 12) *ibid.*
- 13) Póczy, K. Sz. 1967-70, pp. 141, 143-145, figs. 124, 125.
- 14) 朝鮮総督府 1932. 由水常雄 1976, pp. 39-43, fig. 3, pp. 57-59, figs. 26-27.
- 15) Weinberg, G.D. 1988, p. 81, fig. 4: 39, pl. 4: 15.
- 16) 村川堅太郎 1946 (Rep. 1993) では, §49 (p. 132), §56 (p. 137) とともに, “未精製のガラス石”として, 同一の訳語を用いているが, Schoff, W.H. 1912 (Rep. 1974) では, §49 は “flint glass” (p. 42), §56 は “crude glass” (p. 45) としている。

文 献

An 安家瑤

- 1986 「北周李賢墓出土の玻璃碗，薩珊玻璃器的発現与研究」『考古』1986年2期。

Bei 北京市文物工作隊

- 1965 「北京西郊西晋王浚妻華芳墓清理簡報」『文物』1965年12期。

朝鮮総督府

- 1932 (Rep. 1984) 『古蹟調査報告大正13年度，慶州金鈴塚・飾履塚』朝鮮総督府，京都（復刻は出版科学総合研究所，東京）。

Harden, D.B.

- 1936 *Roman Glass from Karanis, Found by the University of Michigan Archaeological Expedition in Egypt, 1924-29*, (University of Michigan Studies, Humanistic Series 41), University of Michigan Press, Ann Arbor.

檀原考古学研究所

- 1977 『新沢千塚126号墳』奈良県教育委員会。

村川堅太郎

- 1948 (Rep. 1993) 『エリュトラー海案内記』生活社（復刻は中央公論社）。

Póczy, K. Sz.

- 1967-1970 Découvertes archéologiques récentes de verres en Hongrie, *Bulletin de l'Association Internationale pour l'Histoire du Verre No. 5 1967-1970*, Édition du Secrétariat Général à Liège.

Schoff, W.H.

- 1912 (Rep. 1974) *The Periplus of the Erythraean Sea, Travel and Trade in the Indian Ocean by a Merchant of the First Century*, Longmans, New York (Rep. by Oriental Books Reprint, New Delhi).

曾野寿彦・深井晋司

- 1968 『デーラマン III, ハッサニ・マハレ, ガレクティの発掘, 1964年』(東京大学イラク・イラン遺跡調査団報告書8) 東京大学東洋文化研究所。

Sorokina, N.

- 1972 Die Nuppengläser von der Nordküste des Schwarzen Meeres, *Annales du 5^e Congrès de l'Association Internationale pour l'Histoire du Verre (Prague 6-11 Juillet 1970)*, Édition du Secrétariat Général à Liège.

Weinberg, G.D.

- 1988 *Excavations at Jalame, Site of a Glass Factory in Late Roman Palestine*, University of Missouri Press, Columbia.

由水常雄

- 1976 「古新羅古墳出土のローマン・グラスについて」『朝鮮学報』第80輯。